

.....

随 想

.....

ユ タ の 少 女

—大 文 字 の 私—

大 谷 南 海 男*



10年ほど前の10月中旬の朝のことです。ロッキー山脈の山懐に抱かれた美しいソルト・レイク・シティの空はすがすがしく晴れあがっていました。私はユタ大学本部付近の美しいキャンパスを通り抜けて、丘の麓にひろがる町の中心へ行くバスに乗りました。10分ほどたつた時です。私の隣から明るい声がしました。

「おじさん。この町へ観光にきたの」

いつ腰をかけたのか、齢の頃なら小学校3、4年生くらいのかわいい少女が、隣の席でにこにこしています。

「そうだよ。あなたはこの町に住んでいるの」

「ええ」

「この町はほんとに美しいね」

彼女はニコリ笑います。

「どうもありがとう」

やがてバスが市内にさしかかると、彼女は私に軽く手をふつて、バスを降りていきました。

——話はこれだけですが、私はそのとき強い印象を受けました。「なんという生き生きとした少女だろう」。私との会話は短いけれども、彼女には相手が外国人だとか、言葉はどうだろうかといった屈託はありません。しかも「この町は美しい」とほめられれば、わがことのように「ありがとう」と返礼を忘れません。その大らかな態度は大人の私と対等以上です。私は日本に残してきた同年輩の私の娘や、友人の娘たちと彼女とを心の中で比べてみるのです。はたして私の娘は名古屋の町をほめられたとき、即座に「おじさん。ありがとう」と言うだろうか。いや、その前にバスの中で隣にすわつた外国人に、日本語で明るく話しかけているだろうか。私は少女の降りたバスの中で、しきりに遠い日本を思うのでした。

今もなお、秋が巡ってくるたびに、私はこの明るいユタの少女のことを思い出すのです。そして教師の私は「日本の子供もこんなに生き生きと育てたいなあ」と思うのです。そのためには、いろいろなことが必要だろうと思います。ここで1つだけ言えることは、ユタの少女の明るい笑顔は、彼女の自主性を損なわない自由な環境——わがままを許すという意味ではなくて——と無縁ではないという推察です。

この推察の確からしさを示す1つの例として、彼女らの社会での「I(アイ)」と、私たちの社会での「私」という文字の相違に注目してみたいと思います。人間は誰でも「私」が大切なことを知っています。ところが、われわれの社会では伝統的に、表向きには「私」は大切ではありませんでした。その証拠に「私」とつく言葉には——私利、私欲、私生児、私語、私物化、私闘など——すべて暗いイメージが付きまとっています。もちろん謙譲の美德は大切ですが、それを説く前に、すべての人びとにとつて

* 名古屋工業大学教授 工博

「私」はかけがえのない大切なものであるという相互理解が重要です。われわれの社会では、立て前としては、これを十分に認めなかつたところに不自然さがあると思います。このようなわけで、上にあげた「私」という文字の使い方にも、「私」の尊さを教えるものが少ないのだらうと思います。

これに比べると、「私」を I と大文字で、「相手」を you と小文字で書く英語国民は、むしろ素直ではないでしょうか。日本語にすれば「小生」ではなくて「大生」ということになりますから。これは彼らの社会では3歳の幼児でも、自分を I と大きく書き、保護する母親を you と小さく書いてよいことを意味しております。当然、大統領に対しても you と小さく書くことが許されます。これは個としての I の尊さを、幼児を含めて、すべての人びとに対して認めていることにほかなりません。この点、私は西洋の社会での人間に対する省察の深さを感じます。

つまり彼らの意識では「私」の身分はどうであつても、「私」はひとしく尊重すべき大切な主体であることを堂々と主張していることになります。同じ人間の社会でも、東洋では「私」を必要以上に卑下し、制約しすぎるのに、西洋ではその尊さを頑固なほどに主張する意識の相違をよく考えてみる必要があると思います。現在のわれわれの社会では、民主的なルールが根をおろしにくいのも、結局はこのような意識の相違に深い関係があると考えるのは思いすぎでしょうか。

本能的に卑下しようのない大切な「私」を、いつも卑下しなければならない制約の下におかれた社会では、「私」はいつたいどうなるでしょうか。警戒心ばかり発達した卑屈な人間と、それを冷笑する横柄な人間の群を生むだけでしよう。それは封建の昔や植民地の人びとの様子を想像すれば、すぐわかることです。そこではユタの少女のような生き生きとした子供は育ちにくいと思います。逆に、このユタの少女が素直で明るいのは、「私」を I と大文字で主張する社会で、この少女が「私」の尊さ——したがって他人の「私」の尊さ——を教えられながら育っているからだろうと推察するのは無理でしょうか。

私はこれからの日本の子供たちにも、「私」は「小生」ではなくて、おたがいに「大生」であることを教えるように主張したいのです。いまでは、わが国も鉄鋼生産量が世界第3位の経済大国に成長しましたが、社会一般の物の考え方や見方には、やはり父祖伝来の傾向が善きにつけ、悪きにつけて、受け継がれております。東洋に起こりがちな停滞性を打ち破つて、将来の日本をバランスのとれた明るい文化国家にしてくれるのは、きつとこのような教育を受けた子供たちではないでしょうか。それとも、このように夢想するのは、田舎教師の楽観と妄想にすぎないのでしょうか。